

## ◆ 『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.8 (2013年2月号) ◆

購読会員の皆さま、ニュースレター第8号を送ります。今後も「Intelligence」会員専用ウェブサイトとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。なお、購読を継続されている会員の中で9月からの新年度の会費を納入されていない方は、お早めにお納めいただきますようお願い申し上げます。

**【1月20世紀メディア研究会の概要】 (1月26日午後2時半～5時半) 司会：川崎賢子・蔡宜静 (演劇博物館訪問学者・現台湾康寧大学助理教授) 「国立台湾歴史博物館所蔵戦前日本映画フィルム史料および映画検閲脚本の整理分析——政策宣伝の内容に関する若干の考察」：日本による占領下の台湾で上映され保存されていた国策映画資料について、傾向を分類し、解説し分析していただいた。**

・ピーター・オコーノ Peter O'Conno (武蔵野大学教授) 東アジアにおける情報拠点地の諸相——1927年から1945年にかけて上海の外国プレスに見られる力と弱点を中心に *News hubs in East Asia :the power and fragility of Shanghai's foreign press,1927-1945* [通訳：鈴木貴宇 (東邦大学)]：蒋介石率いる国民政府が南京に成立したことにより国民党と中国共産党が対立関係となってから、第二次世界大戦終結により再び共産党の支配が確立するまでのおよそ20年間の、共同租界上海において発行された新聞の変化についてご報告いただいた。とくに「チャイナ・フォーラム」「チャイナ・ウィークリー・レビュー」を事例として、上海における外国プレスの様態と、この時期競合していた国民党・中国共産党・欧米及び日本のプロパガンダ報道のネットワークが報道機関を情報統制下に置くためにどのような手段を用いていたかが考察された。

・有馬哲夫 (早稲田大学社会科学総合学術院教授) 「インテリジェンス・エージェントとしての児玉誉士夫—インテリジェンス・エージェントとしての児玉機関」：SSUが児玉機関をインテリジェンス機関と見たこと、児玉誉士夫の来歴を再検証し、物資・資金調達、輸送、募兵、派遣、インテリジェンス収集を行う組織としてのインテリジェンス機関について考察しご報告いただいた。児玉は機関長として中国各地の日本軍と国民党、共産党の動き、戦略物資についての情報を海軍本部に伝えていたのである。

※なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> (閲覧は『Intelligence』の購読会員に限定されています。)

●次回3月の研究会は、3月30日(土)午後2時半から、藤田篤子、志村三代子、吉田則昭の三氏にお話し頂く予定です。それ以降は4月27日(土)、5月は25日(土)、6月29日(土)、7月20日(土)の予定です。また、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所まで、メールにてご一報下さい。[m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp)

**【気になる新作映画の紹介】【敬称略】**

「戦争と一人の女」（井上淳一監督、荒井晴彦脚本、寺脇研プロデュース、青山真治音楽）が公開される。日本映画の挑発的な才能が集結し、坂口安吾「戦争と一人の女」「続戦争と一人の女」「墮落論」「白痴」のエピソードに小平事件などを絡めた問題作。戦争と性を「オモチャ」と称した安吾の「戦争と一人の女」は GHQ 検閲で原形をとどめぬほど削除処分を受けたことでも知られ、プランゲ文庫によって全貌が明らかになったテキストでもある。311 後に二〇世紀日本の戦争を考えるとどうしてもイメージが重層し時間が逆行するような眩暈をおぼえる。

**【今月のコラムー「定本久生十蘭全集」】**

足かけ十年「定本久生十蘭全集」（江口雄輔・川崎賢子・浜田雄介・沢田安史共編、全11巻別巻1、国書刊行会）が完結した。筆者にとっては学生時代から先行する三一書房版全集の年譜や著作目録を検証し、博文館の雑誌「新青年」バックナンバーを渉猟した、長年の研究対象。卒論を再提出した感じ。

[2月25日付文責：川崎賢子]